

Martine Dulaey, 'L'apprentissage de l'exégèse biblique par Augustin (2): Années
390-392', *Revue des Études Augustiniennes* 49 (2003) 43-84.

上村直樹

アウグスティヌス (= Aug.) がアフリカ帰還後のタガステにおいてあらわした著作のうち、『真の宗教』と『書簡』22、23 を分析することによって、Aug. に先行する教父の聖書解釈の影響関係を検証する。(I) はじめに、旧約の釈義については限定的である『真の宗教』から、「ヨハネ福音書」9:6 の盲人の眼を癒した泥のエピソードと、「マタイ福音書」のタラントの話がえらばれる。前者については (I-A-1)、土が人間的な要素を、キリストの唾が神的な要素を象徴するという、また、後者については (I-B-1)、「マタイ福音書」と「ルカ福音書」を結合するという Aug. の解釈を明らかにする。ついで、先行する釈義の伝統をさぐる。前者については (I-A-2)、アンブロシウス (= Ambr.) が Aug. とオリゲネスを媒介したという関連を、後者については (I-B-2)、Ambr. 以上にヒエロニムスとの類縁性をしめす。(II) 次に、二通の初期書簡をとりあげる。『書簡』22 については (II-A)、パウロと「詩篇」からの引用の所在を確認する。一方、『書簡』23 に関して (II-B)、三つの論点をたてる。まず (II-B-1)、ドナティストのマキシミヌスに宛てて教会への再結合を促すという論に認められる釈義から、オプタトゥスの *Contra Donatistas*、Ambr.、キプリアヌスといった影響が見出される。ついで (II-B-2)、割礼の儀礼について、「出エジプト記」4:24-26 に関するオリゲネスや、テルトゥリアヌスの *Adversus Iudaeos* の解釈を呈示したうえで、Ambr. の『書簡』66 が Aug. 的な解釈と相関していることが証示される。さらに (II-B-3)、「ヨシュア記」におけるギルガルでの割礼とヨルダン渡河に関する釈義の伝統をさぐることで、オリゲネスにいたる系譜がヒラリウスと Ambr. に影響を与えたことが攫まれる。以上の検証をとおして、Aug. の釈義の方法について、さらに多様な説明についてもっとも影響をおよぼした教父が Ambr. であるという結論が、そのつながりについてさらなる考察が求められるという留保のもとに、提出される。